OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国人日本語学習者の日本語発音の評価 ： 韻律的特徴を中心に
Author(s)	張, 若星
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 47-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53325
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国人日本語学習者の日本語発音の評価
—韻律的特徴を中心に—

張若星

要旨　本研究では、中国人日本語学習者の日本語発音の韻律面に関しての問題点を探るために、独自の資料を使って日本語母語話者がどのように評価するか、評価実験を行った。6名の学習者を日本語習得レベルにより2段階に分け、日本語の文章を読んでもらい、日本語母語話者に10の音声評価項目について点数をつけてもらった上、コメントについても述べさせた。結果として、評価は学習者個別の学習経験や日本滞在期間との不一致が際立った。全話者の平均としては特に評価が低い項目はなかったが、全体的意思伝達との相関関係が特に高い項目は「子音の清濁」、「文末の上げ下げ」、「言いよどみ」であり、日本語の韻律の教育の中で力を入れるべき分野といえる。学習者に子音の清濁と促音の問題があることは先行研究の指摘の通りである。そして、「抑揚が激しい」という指摘に対しては、異なる結果が得られた。つまり、本研究の結果では、学習者はむしろ抑揚が弱いが、これは今回用いた資料が文章の読みであるためと思われる。今回の実験において、学習者は皆機械的に読むだけであった。日本語教育の中で、ダイナミックした感情を含んだ話し方も学習者に教えるべき項目であり、聞き手に一回聞いただけでは、一番言いたいことが何なのかがわかるように、楽しそうに話す能力も培うべきである。

1 研究動機

近年、外国語教育の目的はコミュニケーション能力、特に口頭表現能力を身につけることに置かれるようになってきた（小河原 1997）。筆者自身の日本語学習の経験では、イントネーションの違いによる表現意図の違いを理解し、気持ちを正しく伝える方法は学んでいない。日本語のイントネーションには上昇調・下降調・平調等の型があり、音の長さ、高低の幅の音声特徴を加えることで、疑問、喜び、否定、意見求め、確認、推量、ためらい等が表現できることはわかったが、なかなか意図通りに話せなかった。日本に来て自然な会話におけるイントネーションの重要度を再認識し、中国人日本語学習者の発音、特に韻律的特徴における特徴と問題点を解明したいと考えた。また学習者の話す日本語を聞いて日本語母語話者はすぐに中国人だとわかることが多いようだが、その判断は何を手掛かりとしているかも知りたい。

2 先行研究

『新版日本語教育事典』では、北京語母語話者の日本語発話の特徴を以下のようにまとめている（朱春躍氏執筆）。

母音では、e,o が二重母音的になりやすい。ウを円唇化した[u]で発音する。ユを iou と発音するので、ヨに聞こえ、撥音を含め[ユ・ヨ]の区別が難しい。母音の無声化も問題。子音の有声音・無声音の違い、促音は調音、知覚ともに困難。撥音は直前の拍と連結して北京語の（C）Vn が（C）Vŋ 音節になる。アクセントは高低の幅が大きく、激高しているように聞こえる。語アクセントを-2 型にし、複合語は分割して発音する傾向がある。リズムでは、長音、促音、撥音の長さが不足しがち。イントネーションでは、全体として抑揚が激しく、日本語的自然下降が実現しにくい。

また、中国人日本語学習者の音声理解能力や指導法に関する研究は少なくない。

例えば、林(1981)は、中国人初学者は、清音と濁音の区別、長音と促音、さらに撥音「ん」の誤りが特に多いことを示している。特殊拍の問題は戸田(1998、 2003)などで扱われている。子音の清濁については、水谷(1974、蔡(1976)、杉藤・神田(1987)、朱(1994)などの研究がある。

韻律的特徴については、アクセントに関する研究もあるが(尤東旭,2002 等)、イントネーションの特徴として土岐(1989)は、中国語話者は日本語の上昇イントネーションを比較的習得しやすく、全体的パターンが日本人に近いが、上昇が緩やかで、上昇幅が狭いとしている。疑問文の特徴について、陳(1992)によれば、中国語話者は日本語の平板型と尾高型アクセントの一語問い返し疑問文の文末を緩やかに上昇させることができるが、目本人のような急上昇させるピッチ曲線は実現しにくい。また、頭高型と中高型アクセントの一語問い返し疑問文では、文全体のピッチレベルが平叙文より高くなるが、文末のピッチ曲線が下降するとしている。

3 今回の調査の目的

独自に収集した音声資料を使って、中国人日本語学習者（以下「学習者」とする）の日本語発話における特徴および問題点について先行研究も踏まえながら自分なりに整理し、日本語音声教育に役立てるための参考とし、そして、さらなる研究のための手掛かりを得ることが今回の調査の目的である。特に韻律的特徴に注目する。また、この調査を通じて、学習者の話す日本語を聞いて日本語母語話者（以下「母語話者」とする）が中国人だと判断するのは発音のどの部分であるかについても手掛かりが得られるのではないかと考えた。

4 調査方法

話しことばによるテキスト（会話）と書きことばによるテキスト学習者に読ませ、その録音を母語話者に聞かせ､韻律的特徴を中心とした 10 項目について日本語としての適切さを 5 段階で評価してもらい、気が付いたことを自由記述形式でコメントしてもらった。

学習者は日本語習得レベルにより 2 段階に、すなわち、日本語学習歴が 2 カ月未満、及び 2 年以上に分ける。母語話者は外国語教育経験の持つ 7 名と外国語教育経験の持たない 3 名である。

調査の実施期間は 2014 年 8 月から 12 月にかけて、6 名の学習者に大阪大学の無響室、または静かな教室に来てもらい、それぞれテキストを読んでもらい、録音した。そして、10 名の母語話者評価者に評価シートに点数をつけ、評価してもらった。また、各学習者の発音に対するコメントを述べてもらった。

4.1 読ませる資料

読ませたテキストは次の 2 種類で、どちらも振り仮名付きであった。

一 普段生活に近い場面の 2 人の対話であり、『日本語能力試験公式問題集 N3』の p.59 の聴解スクリプト 5 番であり、留学生のホームステイについての文章である。

M：すみません、このホームステイに申し込みをしたいんですが。締め切りまだですよね？

F：はい、まだ間に合いますよ。参加は初めてですか。

M：いえ、2 回目です。2 回目でも大丈夫ですか。

F：はい、大丈夫です。えー、日本に来てどのぐらいになりますか。

M：10 か月を過ぎたところです。あと、1 か月で帰国する予定です。

F：そうですか。んー、実は、このホームステイは、来日してから半年以内の留学生しか申込みができないことになっているんですよ。

M：え、そうなんですか。

二 学習者にとって馴染みのない話題の一段落の文章であり、『日本語能力試験公式問題集 N1』の p.65 の聴解スクリプト 7 番、高齢者の介護についての文章である。

政府の調査によると、介護が必要になった場合に自宅での介護を希望する高齢者は、6 割を超えるそうです。バリアフリー住宅への改築が増えているのも、住み慣れた自宅で生活を続けたいということの表れでしょう。ですから、在宅での介護サービスを充実させ、安心して自宅で生活ができる環境を作ることを、政府に強く望みたいと思います。もちろん、介護施設を増やすことや、介護施設でのサービス内容を向上させていくことも必要にはなります。しかし、今、政府が何に最優先で取り組むべきかは明らかではないでしょうか。

4.2 学習者および評価者の構成

6 名の学習者および 10 名の評価者の構成を表 1 と表 2 に示す。

4.3 評価シート：

以下の10項目について5段階で評価してもらった。

評価の選択肢は「①適切でない。②どちらかというと適切でない。③何とも言えない。④どちらかというと適切。⑤適切」である。

●単音とアクセント

[1] 単語の発音は明瞭か

[2] 清音と濁音の間違いはないか（「金」のはずなのに「銀」に聞こえるなど）

[3] 単語のアクセントは自然か（「雨」と「飴」の違いのような問題）

●イントネーション関係

[4] 強調すべき箇所と強調してはいけない場所を正しく理解しているか

[5] 文節の最後に不要な上げ下げがなく自然か

[6] 高低の幅は適切か（読み方が平板でぼそぼそとしていないか、ダイナミックすぎないか）

●リズム関係

[7] 拍の数に増加、減少はないか（「東京」をトキョ、「奈良」をナーラのように言っていないか）

[8] ポーズのつけかた（言い淀み以外で区切りのしかた）はよいか

[9] 途中の言い淀みは少ないか

●総合評価

[10] 全体として意思伝達に問題がないか

5 分析と考察

5.1 学習者の各項目における点数の平均値

6 名の学習者に対する 10 名の母語話者がつけた点数について学習者ごとに平均値と標準偏差を計算し、表 3 にまとめた。また、各項目の平均値を図 1 に示した。

図 1 からわかるように、10 項目の平均評価にはさほど差がない。その中で比較的高い評価を受けたのは、<10.全体意思伝達>、<5.文節末上げ下げ>、<2.清濁>である。それに対して、比較的低い評価を受けたのは、<7.拍の増減>、<9.言いよどみ>、<6.高低の幅>である。

つまり、学習者にとって、全体的な意思の伝達はあまり問題がなく、文末における不要な上げ下げもなく、清濁もさほど問題はないということになる。

表 1　中国人日本語学習者被験者の構成（日本滞在期間の低い順）

	性別	年齢	出身地	専攻	N1 取得	正規教育機関での日本語学習歴	日本滞在期間
学習者 1	男	28	青海省	社会学	あり	3 か月	4 年
学習者 2	女	24	江西省	工学	不明	0	3 年
学習者 3	男	25	上海市	工学	あり	0	2 年
学習者 4	男	22	上海市	理学	なし	0	2 年
学習者 5	男	24	湖南省	工学	あり	2 年半	2 か月
学習者 6	男	25	貴州省	工学	不明	1 年	2 か月

表 2　日本語母語話者評価者の構成

	性別	年齢	言語教育歴
jp1	女	30 代	日本語教育 5 年
jp2	女	30 代	英語教育 4 年
jp3	女	20 代	なし
jp4	女	20 代	英語教育 6 か月
jp5	女	30 代	英語教育 1 年半、ドイツ語教育 7 か月
jp6	女	40 代	ドイツ語教育 1 年
jp7	女	20 代	英語教育 3 か月
jp8	女	20 代	日本語教育 4 年、英語教育 5 年
jp9	男	20 代	なし
jp10	女	20 代	なし

表 3　各項目における学習者別の平均評価および標準偏差

	単語発音明瞭さ	清濁	アクセント自然さ	強調箇所	文節末上げ下げ	高低の幅	拍の増減	ポーズのつけ方	言いよどみ	全体意思伝達	平均
学習者 1	3.1	3.7	2.7	2.9	3.5	3.5	2.2	3.0	2.8	3.9	3.1
学習者 2	3.6	2.9	2.6	2.8	3.1	3.0	2.4	3.1	2.9	3.5	3.0
学習者 3	3.7	4.0	3.9	3.7	4.3	2.8	3.8	3.6	3.7	4.5	3.8
学習者 4	2.9	2.9	3.1	3.3	3.8	2.6	3.2	3.2	2.2	3.5	3.1
学習者 5	2.9	2.8	2.9	2.8	3.1	2.8	2.8	2.3	2.4	3.3	2.8
学習者 6	3.7	4.0	3.4	3.4	3.9	3.2	3.4	3.5	3.2	4.2	3.6
平均	3.3	3.4	3.1	3.3	3.6	3.0	2.9	3.1	2.9	3.8	
標準偏差	0.392	0.577	0.485	0.372	0.475	0.325	0.612	0.462	0.542	0.466	

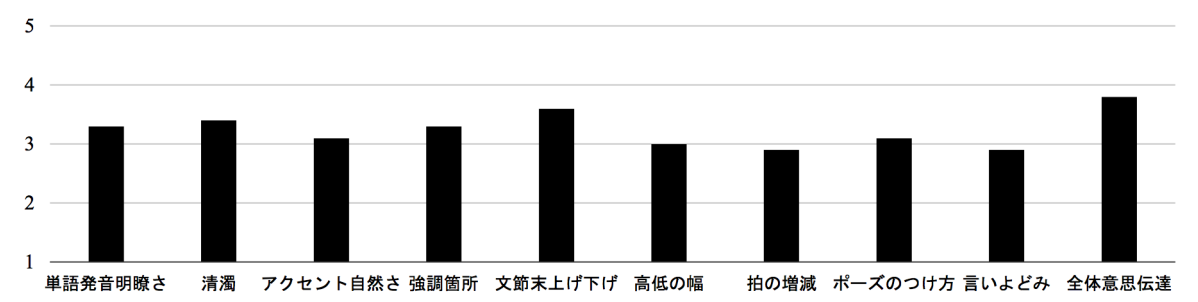

図 1 各項目の平均値

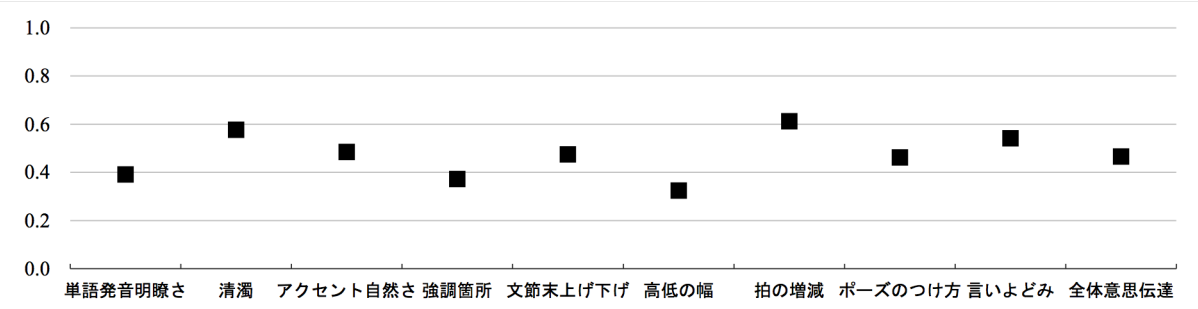

図 2　各項目の標準偏差

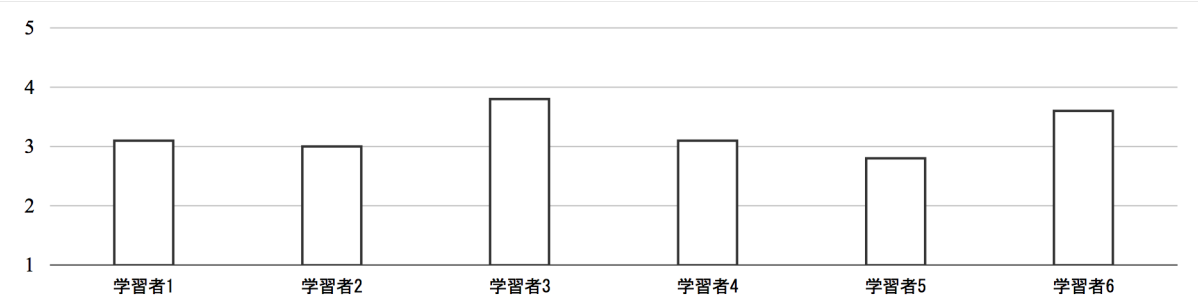

図 3　各学習者の平均評価

次に、各話者に対する評価のばらつきを検討するため、各項目における標準偏差を図 2 に示す。

図 2 からわかるように、標準偏差によるばらつきの大きさも 10 項目でさほど差はないが、その中で比較的学習者によって評価のばらつきが大きい項目は、<7.拍の増減>、<2.清濁>、<9.言いよどみ>である。そして、学習者の間のばらつきが比較的小さい項目は、<6.高低の幅>、<4.強調箇所>、<1.単語発音明瞭さ>である。

図 1 と図 2 をから言えるのは、①<6.高低の幅>が他の項目より低い評価であり、ばらつきも小さいことである。つまり、どの学習者も、基本的に出来がよくない。②<7.拍の増減>、<9.言いよどみ>は比較的低い評価であり、学習者の間で、出来と不出来の差が大きい。

そして、③<2.清濁>は比較的高い評価であるが、学習者の間で出来と不出来の差が大きい。

5.2 学習歴や日本滞在歴との関係

6 名の学習者の平均評価を図 3 に示す。図 3 からわかるように、ここでも大きな差はないが、その中で、学習者 3 と学習者 6 は比較的高い評価を受けている。学習者 3 は正規日本語教育機関において日本語の教育を受けていないにもかかわらず、日本に 2 年間の滞在歴を持ち、日本語が上達したと思われる。つまり、正規日本語教育機関で日本語の教育受けなくても、日本に滞在中に音声として自然度の高い日本語を身につけたと思われる。学習者 6 は、日本滞在期間はわずか 2 か月であるが、中国において 1 年の日本語の教育を受けており、比較的日本に長く滞在している学習者 1、学習者 2、学習者 4 に比べ、高い評価を受けた。

これに対して学習者 5 は、来日はわずか 2 か月である一方、中国の正規日本語教育機関において 2 年半も日本語の教育を受けてきたにもかかわらず、一番低い評価を得た。つまり、中国での正規日本語教育機関で教育を受けてきても、音声面での日本語の運用はあまり上手ではない。学習者 5 と学習者 6 を比べると、同じように日本滞在期間が短く、しかも学習者 6 が学習者 5 より中国での日本語教育機関が短いにもかかわらず、高い評価を受けている。

5.3 各項目の相関関係について

10の評価項目の間の相関関係を知るためにピアソンの相関係数を計算し、表4にまとめた。ここで「全体的意思伝達」に注目し、これと各評価項目との相関係数を抽出し、図4を作って考察する。

図 4 からわかるように、「全体的意思伝達」に特に深く関わっている項目は、「清濁」、「文末の上げ下げ」、「言いよどみ」である。ほかの項目もある程度関わっている。逆にあまり関わっていない項目は、「高低の幅」である。

表 4 各項目の相関関係

	清濁	アクセント自然さ	強調箇所	文節末上げ下げ	高低の幅	拍の増減	ポーズのつけ方	言いよどみ	全体意思伝達
単語発音明瞭さ	0.63	0.47	0.47	0.42	0.22	0.39	0.73	0.88	0.70
清濁		0.65	0.66	0.74	0.49	0.45	0.71	0.81	0.95
アクセント自然さ			0.94	0.90	-0.32	0.96	0.64	0.65	0.78
強調箇所				0.98	-0.29	0.92	0.80	0.60	0.79
文節末上げ下げ					-0.14	0.83	0.81	0.59	0.84
高低の幅						-0.53	0.06	0.25	0.27
拍の増減							0.58	0.47	0.60
ポーズのつけ方								0.68	0.80
言いよどみ									0.89

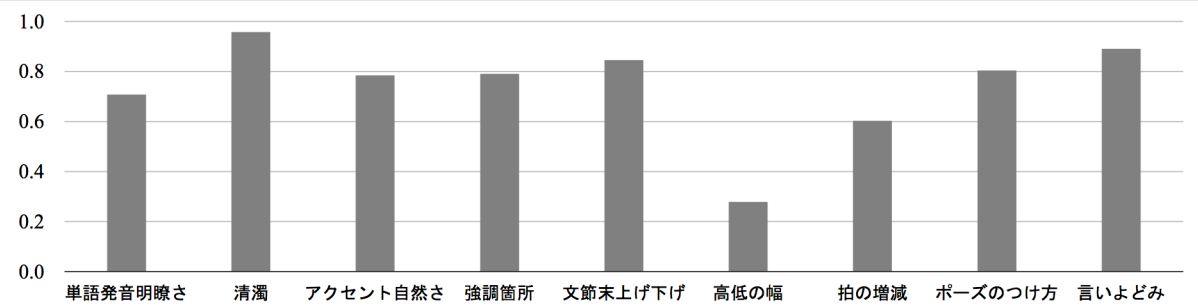

図 4　各項目と「全体的意思伝達」との相関係数

ここから、全体的な意思の伝達のためには、子音の清濁は正しいか、文末における不要な上げ下げがないか、言いよどみが少ないかが特に重要である可能性が考えられる。そして、単語発音の明瞭さや、アクセントの自然さ、強調すべき箇所をきちんと強調したか、拍やポーズが正しいかどうかも重要である可能性が考えられる。高低の幅は全体的意思伝達という点では重要性は小さいようである。

5.4 評価者のコメント

10 名の母語話者のコメントをまとめると、全般的な傾向として、発音を聞いて、「すぐに中国語話者だとわかった」というものが目立つ。その具体的な原因は、「漢字語の中国語式読み」、「清濁の問題が多い」、「促音が聞きにくい」、「拍の長短がずれている」などの特徴があるからということである。また、以下のようなコメントもあった。

この実験においては、評価者がほとんど言語学の知識を持っている上、普段からも中国人日本語学習者と接する機会が多いため、発音に慣れているので、「一生懸命聞こう」と思って聞いているので、学習者が何を言っているかが聞き取れて、理解できた。しかし、「もし生の会話だったらどうだろう。」など、「言語学の勉強などをしていない普通の人間が聞いたら、どのような結果になるのであろう」という疑問が上がった。

さらに以下のようなコメントもあった。

話し方は 6 名全員感情が全くなくて、無機質な感じであり、評価者が聞いているうちにあまりテンションが上がらないという。一回聞いただけでは、一番言いたいことが何なのか、伝わりにくい。少し楽しそうに話したら伝わるはずである。これは、もしかして中国人日本語学習者の特徴なのかもしれない。

5.5 具体的な言い誤りの典型例

① 清濁：「参加」→「さんが」、「まだですよね」→「まったですよね」、「取り組むべきか」→「取り組むべきが」
② 促音：「10 か月」→「じゅうかげつ」、「自宅」→「じったく」、「来て」→「きって」
③ 拍の増減：「申込」→「もうしこーみー」

④ 単音の間違い：「必要」→「ひすよう」、「最優先」→「さいゆうせい」、「安心して」→「あんひんして」、介護→「かんご」、高齢者→「こうりんしゃ」
⑤ 複合語を一つのアクセントにまとめない：「介護施設」→「介護↓施設↓」、「サービス内容」→「サービス↓内容↓」

6 まとめ

本研究では、中国人日本語学習者の日本語発音の韻律面に関して独自の資料を使って評価実験を行った。結果として、評価は学習者個別の学習経験や日本滞在期間との不一致が際立った。全話者の平均としては特に評価が低い項目はなかったが、全体的意思伝達との相関関係が特に高いのは「子音の清濁」、「文末の上げ下げ」、「言いよどみ」であった。

学習者に子音の清濁と促音の問題があることは先行研究の指摘の通りである。しかし、「抑揚が激しい」という指摘に対しては、異なる結果が得られた。つまり、本研究の結果では、学習者はむしろ抑揚が弱い。しかし、これは今回用いた資料が文の読みであるためと思われる。

韻律については、「文末の上げ下げ」、「言いよどみ」が全体的意思伝達との相関が特に高く、今後の研究がさらに必要である。

今回の音声実験において反省するべき点として以下が挙げられる。

まず、終助詞が少なく、学習者の終助詞の産出について評価することが困難であった。そして、学習者によって会話文が説明文の読み方より上手な学習者もいたのにもかかわらず、発話データを両方同時に評価してもらったことで、評価者にとって評価基準が統一しにくい結果になった。これらは今後の実験において改善すべき点である。

日本語の教育の中で、生き生きとして話す練習は少ないようである。今回の実験において、学習者は皆機械的に読むだけであった。つまり、日本語教育の中で、ダイナミックな感情を含んだ話し方も学習者に教えるべき項目であり、一回聞いただけで一番言いたいことが何なのかがわかるように、楽しそうに話す能力も培うべきである。

参考文献

鮎澤孝子(2003)「外国人学習者の日本語アクセント・イントネーション習得」『音声研究』7-2, pp.47-58
小河原義朗(1997)「外国人日本語学習者の発音学習における自己評価」『教育心理学研究』45, 4, pp. 438-448.
小河原義朗(2001)「日本語非母語話者の話す日本語に対する日木人の評価意識—日本語教育における言語意識—」『日本語学 7』pp.64-73.
小柳かおる(2004)『日本語教師のための新しい言語習得概論』スリーエーネットワーク.
杉藤美代子編(1989)『講座日本語と日本語教育 第2巻 日木語の音声・音韻(上)』明治書院.

杉藤美代子(1989)『講座目本語と日本語教育 第3巻 日本語の音声・音韻(下)』明治書院.
谷口聡人(1991)「音声教育の現状と問題点」『シンポジウム日本語音声教育』pp.20-25, 凡人社.
陳文芷(1992)「中国語話者による日本語疑問文文末の韻律的特徴」『日本語の韻律に見られる母語の干渉（3）—音響音声学的対象研究—』文部省重点領域研究「日本語音声」D1班平成2年度研究成果報告書 pp.1-26
土岐哲(1989)「中国人・韓国人・アメリカ人による日本語のイントネーションとプロミネンス」『講座日本語と日本語教育3 日本語の音声・音韻（下)』pp.258- 287, 明治書院.
水谷修(2005)『新版日本語教育事典』大修館書店.
劉佳琦(2014)「中国における日本語音声教育の現状と課題—復旦大学日本語学科の取組みから—」『早稲田日本語教育学』16, pp.105－116.
劉淑媛(1983)「中国人学習者によく見られる発音上の誤りとその矯正方法」『日本語教育』53, pp.93-101